色彩学　第3巻　第1号　2024年　36－37

国際会議報告

2023中国伝統色彩学術年会への参加報告

Report of Participation in the 2023 Annual Academic Conference on Chinese Traditional Colors

國本 学史　慶應義塾大学，埼玉大学，黄岡師範学院，西安美術学院
Norifumi Kunimoto　Keio University, Saitama University, Huanggang Normal University, Xi'an Academy of Fine Art

1．2023中国伝統色彩学術年会

筆者は2023年11月17-18日に，中国北京市で開催された「2023中国伝統色彩学術年会」の参加報告を行う．中国伝統色彩学術年会は2016年より開催されており，2023年で8回目を迎える．中国国内各地から招聘された研究者の他，これまでイギリス，フランス，韓国，香港，マカオ，台湾，日本等から研究者が招聘されている．筆者は2018年より招聘されており，2023年も参加した．2018年以降，日本との研究交流が重点的に継続されている．中国芸術研究院主催で久しぶりの北京現地開催となる予定であったが，以前のコロナ禍の影響もあったためか，全面オンラインでの開催へと変更された．外国人は短期間の中国滞在でもビザ取得が必須な状況でもあり，様々な事情が考えられる．中国伝統色彩学術年会は，今後も継続しての開催が目指されている（図1は本報告の2023年度会議のポスター画像）．

図1. 2023中国伝統色彩学術年会　会議ポスター画像．
画像は，中国伝統色彩学術年会事務局より提供

2．学術年会のオンライン開催

2023年の中国伝統色彩学術年会は，全講演・視聴参加がオンラインで行われた．11月17日の視聴者数は約2万1000人で「いいね」のクリックが5万2000，11月18日の視聴者数は1万8000人で「いいね」のクリック数が3万という主催者情報が伝えられ，筆者も視聴チャンネル（騰迅会議による放映チャンネル）の画面を見て両日共に確認している．質疑応答は学生・院生からの質問が多いが，染色家等の制作者や実業家等による質問もある（図2）．幅広く一般の視聴者を多数獲得していることは，伝統色彩研究に対する中国の社会的な関心の高さを示すものと言って良い．発表者は，騰迅会議アプリ（外国語版はVooV Meeting）を通じて視聴・講演を行った，日本語から中国語への翻訳は，Zoomを用いた逐次通訳によって翻訳された．逐次通訳は日本語から中国語への翻訳で時間が掛かる欠点があり，一方で翻訳音声をシャットダウンした同時通訳は発表時間を守りやすいがスライドとの連携が難しい．オンラインの国際研究集会の有用性が明白なこんにちではあるが，翻訳が介在するオンライン会議の解消すべき課題は残る．当会議において，質問者は携帯電話等を活用して質問事項を講演視聴後に即座に動画撮影し，事務局が背景画像を付けて提示するプロセスはスムースである．更なる疑問・質問は，視聴者が講演者のWeChatアカウントを探して直接尋ねることもある．こうした一連のやり取りは，中国におけるデジタルデバイスの浸透と活用ぶりが見て取れる．デジタルデバイスを活用した参加者と研究者が繋がりやすい体制は，日本の学術活動でも大いに見習うべきものと言える．

図2. 染色家李金豹氏の質問の様子

3. 日本からの参加研究者と講演内容

招聘された日本の研究者は，日本画家・東京藝術大学大学院教授の荒井経氏，武蔵野美術大学教授小林昭世氏，慶應義塾大学／埼玉大学非常勤講師・黄岡師範学院／西安美術学院特聘教授の國本学史（筆者）の3名である．日本からの参加者が3名にとどまったのは，招聘時のビザ取得の困難等も考えられる．報告者は別の時期に教育のため中国の大学を訪問したが，学術目的のビザでも取得は困難を極めた．学術年会は2日間に渡り，第1場から第8場までの各セッションが，講演者3-4名と主講人（司会），評議人（評価）1名ずつのセットで展開するスタイルは例年と同様である．講演者は総勢26人であった．日本の研究者の講演を紹介順に要約する．荒井経氏は，近代日本の色彩材料の通史というべき内容で，19世紀から現代に至るまでの近代日本画の色材についての調査･研究をまとめられた．近代化と西洋を規範とする芸術制作・教育の変遷は，日本のみならず中国にも当てはまる現象であると指摘された．小林昭世氏は，環境色彩と伝統色彩について，平安時代の文献『作庭記』（同名称は江戸時代）を参照しつつ講演された．環境色彩が記録されない疑問への答えとして，遠景や変化の少ないものの記録が少ない，と返答される小林氏の指摘は示唆に富む．文化財等における色彩の漸次的な変化についても記録が少ないことを連想させられた．國本は，東アジアの嚆矢というべき日本近代の色彩教育体制の出現と，教育制度挫折の背景についてまとめた．中国と日本という漢字文化圏において，西洋文化の受容と色彩教育がいかなる言語と体制で展開したのか，という比較研究的主題と言える．

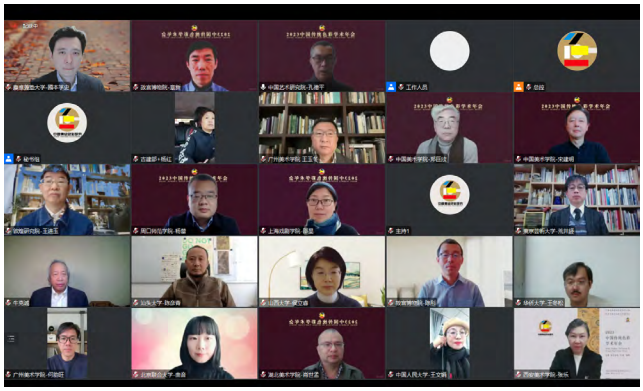

図3. 講演者等の記念撮影（開会式）時の様子

4. 2023年度の中国伝統色彩学術年会のテーマと構成

2023年の中国伝統色彩学術年会のテーマは，「東方色彩：生成と滋萌」で，東洋色彩の生出的な意味と言える．例年通り厳密なテーマの厳守は求められないが，当該テーマに沿った内容で多くの研究内容が提示されていたと言って良い．会議開催の意義については，様々な著名研究者たちのコメントを記録した動画が開会式で放映された．会議名に伝統色彩と冠していても，その成果は現代の芸術制作の他，社会インフラや都市開発事業への貢献の可能性が言及されることが多い．Web配信における視聴者数の多さを考慮すれば，会議は社会との関わりについて有用な成果を収めていると言える．筆者は会議開催前に在日本中国大使館よりオンラインでの参加形式の事実確認連絡を受け，館の担当者から当該学術活動の意義と学術交流参加への謝意が伝えられた．昨今の複雑な状況がある中で，こうした学術活動が日中間の学術交流の重要な役目を担っていることを実感している．会議開催へのコメントでも「研究者達の国際交流の機会としての意義」が強調されていた．同会議において，これまで会議の主催・発起人として活躍されている，中国芸術研究院国画院院長／美術研究所元所長である牛克誠氏は，「マクロ的視点で視野を広げ，歴史・文化の体系を明らかにすると共に，西洋のスタイルを参考にして伝統色彩研究を現代に活かす必要」を述べられている．伝統色彩という枠組みで内向的になることに対する自戒のような姿勢とも言うべき表現であり，日本でも「伝統色」という言葉で研究の視点を狭めない必要性を痛感した（図4）．

中国の講演者とその内容の特徴としては，昨年と同様，30-40代の研究者の活躍が目立つ．実践的な服飾研究や文献資料に丁寧にあたる服色の研究，色材と建築装飾に関わる堅実な研究が継続して見られると共に，文学的な視点や舞台芸術における研究も見られた．色彩理論や概念の研究も存在感を示している．当会議に示される研究テーマは非常に幅広い．研究者の層の厚さ・幅の広さが，全体的な研究を下支えしていることが感じられ，中国における人文学系研究の強みを目の当たりにする感がある．色彩文化研究の領域に幅広い視点やアプローチがあることは，色彩文化研究領域が，人文学系の研究を牽引して行く一領域となり得る可能性を示すものと言って良い．一方で日本においては，同研究領域に関わる中堅・若手世代の研究者が少ないことが危惧される．グローバルな時代において，東アジアの研究成果を積極的に取り入れながら，日本における色彩文化研究が隆盛することを期待したい．

図4. 牛克誠氏による開会式コメントの様子